

親鸞における病と信仰の交錯 ―身の病と心の病―

同朋大学市野智行

本発表では「仏教と病」のテーマのもと、親鸞（1173～1262）における病への理解について、その信仰との関係に焦点を当て検討したい。一人の仏教者（ここでは親鸞）を取りあげ「病」について論究しようとする場合、おおよそ二つの手法が有効であると考えられる。一つには親鸞が「病」をどう理解していたのか、である。『顕浄土真実教行証文類』を中心とした親鸞の著作から「病」に対する親鸞の理解を考察する方法である。そして、二つ目に考えられるのが、親鸞自身が「病」の身をどう生きようとしたのか、あるいは実際に病の身を生きる人に対してどのような振る舞いをしていたのか、である。親鸞の消息や伝記を中心に、親鸞自身が「病」とどう向き合ったのかを探究していく方法である。そして今回は主に後者に焦点を絞りつつ、両者を統合的に考えてみたい。

そこで注目したいのが、親鸞が83歳（建長7年）の頃に書いたと言われる2通の手紙である（『親鸞聖人御消息集』（広本）第九通目と第十通目）。この2通の手紙は、宛先は異なるが同日に書かれている。第九通は「念仏の人々」へ宛てたもので、第十通は子息善鸞に宛てたものである。その第十通の手紙の中で、親鸞は病を身の病と心の病に分類している。そして、身の病については往生の障りとならないが、心の病は「こころよりやまいをするひとは、天魔ともなり、地獄にもおつることにててもそうろうべし¹」と述べているのである。

たとえば、親鸞自身の病については『恵信尼消息』第五通に「大事におわします²」ほどの高熱にある姿が伝えられている。しかし、親鸞の病に関連する用例の中に、祈禱に該当するものはない。つまり、身の病に対して念仏あるいは他の行を積極的に祈禱として用いることはないと言える。一方で、中世において病の原因の一つとも考えられていた「鬼神」や「天」との関連については「化身土巻」において論じている。ここでの論点もやはり祈禱にはない。

では、病と鬼神や天との関連を親鸞はどのように理解しているのか。そこで注目したいのが「心の病」である。親鸞の先の手紙からは、心の病が具体的に何を意味するかは読み取れない。しかし、同日に書かれた第九通には、天魔と墮地獄について、「念仏のひと、ひがごとをもうしそうらわば、その身ひとりこそ地獄にもおち、天魔ともなりそうらわめ³」と記している。この内容からすると、念仏の道理に合わないことを述べ、人々を惑わすあり方は、心の病に基づくものであると言えよう。なぜ、念仏に出会いながら念仏に対して僻事を述べるのか。心の病とは、念仏をも自我を立てるための手段としていく、私たちの無明性を指摘するものと言えよう。そして、親鸞はその治し難い心の病に対して、阿弥陀の本願を妙薬に譬えていく。本発表では、病に対する鍵語（下記キーワード）についての用例を確かめながら、親鸞における身と心の病について尋ねていきたい。

キーワード：心の病 天魔 本願の妙薬

1 『浄土真宗聖典全書』2 837頁

2 『浄土真宗聖典全書』2 1035頁

3 『浄土真宗聖典全書』2 836頁